働いてわかった！ 教科×仕事

Chapter 3 メッセージ

社会人14人

慶應義塾大学大学院　特任教授　高橋俊介先生

変化の時代に活躍できるのは、学んできた人・学び続けられる人

取材・文／飯田哲子、清水由佳　撮影／清水一也

高校時代の学びと社会とのつながりを考える

ＩＴが発達し、グローバル化が進む中で、社会も、仕事も、大きく変化している。10年前にはなかったような仕事が登場する一方で、従来と同じような仕事でも、より高度で専門的な知識や経験を問われるようになってきた。だからこそ、社会の中で個人がキャリアを確立していくには、学び続けることが必要になっているのではないだろうか。

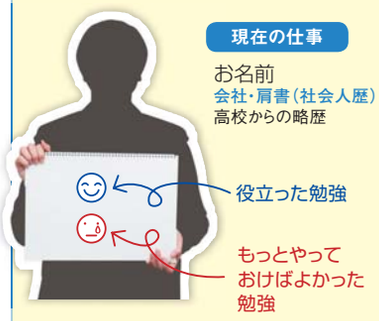
そこで、実際に社会で活躍する人々は、仕事の中でどんな学びが大切だと実感しているのか。社会人14人に、ご自身の高校時代の学びと現在の仕事とのつながりを語ってもらった。そこからは、仕事にダイレクトにつながっている学び、意外なところで役立っている学びなど、多くの「学び」と「仕事」とのつながりが見えてきた。

さらに、人材育成の専門家・慶應義塾大学大学院特任教授の高橋俊介先生に、現在の就業環境と求められる力、高校時代に必要なキャリア教育についての解説もしていただいた。社会の第一線で活躍するには学び続けることがとても大切で、その基礎を培うためにも、高校時代の学びは大きな意味があるという。

「今の勉強が将来にどんな意味があるのか」。その答えを高校生の皆さんが見つけるためのヒントとして役立てていただければと思う。

教材に使える

社会人に聞いた「この教科が仕事に生きている！」



次ページからは、14人の社会人に聞いた「仕事に役立った勉強」「もっとやっておけばよかった勉強」を紹介します。今勉強することが、将来どう役立つのかを伝えるために、社会人の「働いてわかった！」実感をお役立てください。

働いてわかった社会人に聞いた「この教科が仕事に生きている！」

専門学校の広報

小論文の特訓が、広報の文書作成に役立っています

桑原東子さん

専門学校職員（社会人10年）

高校（英語科）→大学（文学部）→機器メーカーでの営業、NPO事務局などを経て現職（広報担当）

高校時代、アメリカに1年間留学した私は、もともと苦手だった国語の「文章を書く」ことが壊滅的にできなくて。先生にお願いして3カ月間、毎日文章を書いては添削してもらう小論文の特訓をしてもらいました。社会人になって特に広報を担当すると、文章できちんと相手に情報を伝えるということが重要なので、このときの経験がすごく役立ちました。また、NPOで働いていたときは海外とのやりとりも多く、日本史をもっと勉強しておけばよかったと思いました。まず、自国のことをきちんと理解しているって大事です。

研修コンサルタント

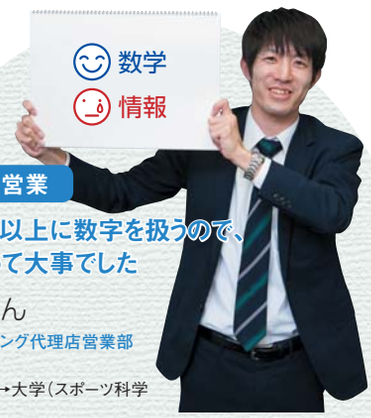
提案営業の強みになる論理的思考回路を、二次関数で学びました

金井健史さん

アクセプト　代表（社会人11年）

工業高校→大学・大学院（工学）→SE→情報会社や教育コンサル会社での営業を経て独立

情報会社や教育コンサル会社での営業は、企業や学校が抱えている問題や課題を明確にして、その解決のお手伝いをするという仕事でした。そのため、現象をモデル化したり、類似性を考えることが重要で、数学や物理の勉強での「論理的に考え、式や表にしたり図式化する」という思考と共通しているなと思います。高校の勉強で言うと、二次関数の場合分けが必要な問題で「この時はこの式」と、条件に合わせて考えていく思考回路は、さまざまな可能性を考えてモレがないように詰めていく現在の仕事に役立っていると思います。



広告会社の営業

営業は思った以上に数字を扱うので、数学の勉強って大事でした

佐鳥翔太さん

ダイレクトマーケティング代理店営業部（社会人1年）

普通科高校（理系）→大学（スポーツ科学部）→現在の会社

クライアントの商品を、通信販売などのダイレクトマーケティングの手法でいかに売れるようにするかなどの提案営業をしています。高校時代の文理選択で理系を選んだのですが、実はそれほど数学が得意ではなくて。でも、今になってそれが役立っています。営業の仕事は、思っていた以上に数字を扱うことが多く、売り上げや効果など細かい数字をしっかり把握し、数字を使って語れるのは自分の強みだとも思います。分析に必要になるので、もっと情報処理などの勉強もしておけばよかったと思います。

旅行会社の役員

事業を創る仕事に国境はないから、英語力は不可欠です

大山恵一さん

旅行会社勤務（社会人25年）

普通科高校（文系）→大学（商学部）→旅行会社へ。現在は旅行の新規事業創出を専門に行う会社役員。

旅行の企画や営業を経て、今は新規事業を創る仕事をしています。高校時代はやっぱり地理や世界史が好きで、旅行のルポをよく読んでいました。『遠野物語』も大好きな本でした。今、本当の意味でのグローバルが始まっていて、仕事をしていると切実に英語をもっと勉強しておけばよかったと思います。旅行英語と、ビジネスで使う英語では全然違っていて、基礎となる文法や構文はすごく大切だと痛感しています。今、私自身、中学英語から学び直しています。

IT企業のSE

外資系企業に入社し、英語の習得スピードに違いが出ました

折本和幸さん

KVH株式会社情報システム部スペシャリスト（社会人12年）

普通科高校（理系）→大学（電子情報工学部）→日系IT企業を経て現在の会社（外資系通信・IT企業）で社内システム管理（SE）

外資系企業に入社したのもありますが、英語、特に単語や文法の基礎をしっかり勉強していたのがよかった。いざ必要になったときの習得スピードが違いました。会話の中でも、何と表現したらいいのか迷っていると、20年くらい前に覚えた単語がふっと出てくるときがあって驚きます。また、数学の微積分等の難問の解にたどり着くためのロジカルなアプローチが、SEとしての訓練になっていたなと思います。高校時代の勉強は、どの分野に進んでも基礎になります。しっかり学ぶと、その後に積み上げるものの習得スピードは絶対違うと思いますよ。

公益財団の職員

文化や美術への造詣の深さが、話題づくりになります

篠原たかこさん

コンピュータグラフィックス（CG）普及の公益財団法人（社会人25年）

普通科高校（文系）→大学（教養学部）→大手メーカーから現職へ転職

CG普及のため書籍を出版したり、様々なイベントを実施したりしています。そのため、仕事関係でお会いするのはデザイン系や工学系の専門家の方たち。当然、私も技術的なことや社会動向などの勉強も欠かせませんが、高校時代にもっと勉強しておけばよかったと思うのは、映画や美術作品をたくさん見ること。また、専門分野はもちろん、文化史や日本史などの歴史的な知識もとても重要です。自分の引き出しがどれほど多いかで、クリエイティブの幅も広がるし、コミュニケーションにも深みが加わります。

役立った勉強

もっとやっておけばよかった勉強

企業内研究所の研究員

統計調査の実施や分析に、文系的な知識が必要になりました

平野智紀さん

内田洋行教育総合研究所（社会人7年目）

普通科高校（文系）→大学（教育社会学）→大学院（教育工学）→現在の職場（教育・情報関連専門商社）

官公庁や自治体からの受託研究を行っている企業内研究所に勤めています。教育関係の大規模な統計調査にかかわっていて、入社3年までは調査に関するシステムの開発を担当し、今は調査の中身についてお客様とやりとりしたり、結果の分析をしたり。数学は苦手でしたが、大学で教育学や心理学を学ぶためには統計など数字を扱うことは必須。ただし、その数字の間にどういう関係があるか、その意味を考えていくのはむしろ文系的な側面で、日本史や世界史で「つながり」や「因果関係」をいろいろ想像して楽しんだ経験が活きていると思います。

経営コンサルタント

会議で重要なポイントをまとめる力を歴史の文章問題で培いました

八木　香さん

株式会社パラスアテナ代表取締役（社会人29年）

普通科高校（文系）→大学（教養学部）→総合電機メーカーから投資ファンド会社に転職し、独立。

日本史や世界史で、「○○○の果たした役割について200字以内で述べよ」などの問題がありますね。自分の興味がない事柄についても、客観的に考えて、ポイントを明確にしてまとめていく。そこで培った力が、社会に出てすごく役立ちました。例えば技術者のミーティングに加わったときに、技術の詳しいことはわからなくても論点を把握して議事録をまとめたり、投資ファンド会社や現在の企業トップへのアドバイス業務などで重要ポイントは何かを瞬時に把握して整理し、わかりやすく伝えたり。自分のキャリアにつながるこの力の源は、高校時代にあったと思います。

物流企業の監査

経営にかかわる文書ばかりなので、国語力が大切です

稲村和彦さん

安田倉庫株式会社内部監査室マネージャー（社会人30年）

普通科高校（理系）→大学（工学系）→現在の会社（物流企業）SEなどを経て、グループ内各部所の監査を担当

現在、社長直属で内部統制のためにグループ内各部所を監査しています。仕事柄、明確な文章を書く必要に迫られるので、国語の勉強の大切さを痛感しています。社会人になってから、アメリカで2年間、現地法人で仕事をしたり、大学で勉強をしたり。そのときに、世界史の重要性を感じました。さまざまな国の人とかかわる中で、相手の国の歴史的背景を理解していることは大切です。あと、生徒会活動をやっていたので、いろいろな人との対話経験が、人とのかかわり方の基礎になっていたなと思います。

広告会社の制作

文章の説得力を増すためにも、数学の論理性は役立ちます

佐藤久美子さん

ダイレクトマーケティング代理店制作部（社会人2年）

普通科高校（文系）→大学（文学部）→現在の会社

ラジオの通信販売のための原稿を作成しています。クライアントの商品を、いかに決められた文字数で効果的に伝えるか。特にラジオは見えない分、文章だけで伝える面白さがあります。高校時代の国語や、時事ネタを取り込んでいく基礎になる政治経済の勉強は今の仕事にダイレクトにつながっていると思います。意外なところでは、数学。論理的な考え方を、もっと身につけておけばよかったと思うんです。原稿の構成を考えるときはもちろん、その原稿のウリを説得するためにも、数学的な論理力は重要ですね。

IT企業の広報

歴史的背景がわかるから、社会情勢の理解が深まります

渡部成美さん

IT企業広報部（社会人9年）

高校（英語科）→大学（地域政策学部）→現在の会社

国内外の各事業から新しいサービスがリリースされたら取材しに行き、社内報で知らせるのが主な仕事です。仕事柄、社会情勢に敏感なことも大切で、歴史が頭に入っていると、関連性を考えるうえで強い。日本史が大好きでよく勉強していたのが、その基礎になっていると思います。また、授業の7割が英語だったので、それがまさに役立っています。ただし外国人スタッフとのコミュニケーションはまだまだ勉強中。今も高校時代の参考書が役立っています。学生時代にもっとグローバルに触れる機会を作ればよかったですね。

建築環境コンサルタント・大学准教授

建築は社会を創る仕事でもあるので、政治経済の知識も大事です

林 立也さん

千葉大学大学院工学研究科　建築・都市科学専攻准教授（社会人13年）

普通科高校（理系）→大学・大学院（建築学）→設計事務所で設備設計や建築物のエネルギー関連のコンサルタントを経て、現職。

建築の仕事は、技術系の仕事の中でも人・社会という視点が強く求められます。財務・会計等の仕組みを知らないとお金を出す人と会話が成立しませんし、コンサルタントとして行政とかかわる際には日本全体の話が必要になるので、マクロ経済や法律の知識は不可欠でした。また、今は本当にグローバル化が進んでいて、最先端で仕事をしようと思うと、当たり前のように英語が必要です。だから、英語を猛スピードで勉強すべき。そして、人間力が重要なので、その基礎となるあらゆる教科をしっかり学んでほしいと思います。

マネジメントに大切なチームワークを体育で学びました

吉井 聖さん

IT企業の経営企画

IT企業経営企画室（社会人8年）

普通科高校（文系）→大学（法学部）→現在の会社

仕事は幅広く、経営にかかわることから企業広報、新入社員の採用や教育も行っています。社内外に外国籍のスタッフが大勢いますので、英語は必須の日常言語です。とはいえ、プレスリリースなどの文書は英文翻訳する前に、日本人として真っ当な報告書を作成しなくてはいけないので、文章力も必須。意外に大事だったと思ったのが、体育です。自分はスポーツが苦手だったのですが、不得意なことにも挑戦することや、チームプレーの重要性を学びました。マネジメントでも、人の違いを受け入れることの基礎を養ったと思います。

クレジット会社の商品開発

海外企業の日本進出によって、英語力が必須になりました

矢嶋浩明さん

クレジットカード会社商品開発（社会人26年）

普通科高校（文系）→大学（法学部）→現在の会社

クレジットカード会社で、安全にカードを利用してもらうための技術などテクノロジー系の商品開発に携わっています。海外企業の日本進出に伴って、外国人と交渉する機会もすごく増えています。英語の資料や契約書のやりとりは厳密に意味を把握する必要があるので英文法が役立っていると思います。ただし、コミュニケーション力は身についていなかったので、もっと「話す」英語力もつけておきたかった。今、大学の社会人向け英語講習を半年間受講したり、猛勉強中です。

教科と実社会の関連や学びの面白さを伝え、変化に対応できる応用力を養いたい

取材・文／清水由佳　　撮影／中岡邦夫

慶應義塾大学大学院
政策・メディア研究科　特任教授
高橋俊介先生

たかはし・しゅんすけ●東京大学工学部航空工学科卒。日本国有鉄道勤務後、プリンストン大学院工学部修士課程修了。マッキンゼーアンドカンパニー、ワイアット社を経て独立し、ピープルファクターコンサルティング設立。2000年5月より2010年3月まで慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科教授、同大学SFC研究所キャリア・リソース・ラボ研究員。2011年9月より現職。個人主導のキャリア開発や組織の人材育成の研究・コンサルティングに従事。

学んで得られる結果ではなく学ぶこと自体に興味をもつことが大切

2010年から11年にかけて、当時、高橋俊介先生が研究員として所属していた慶應義塾大学SFC研究所キャリア・リソース・ラボとリクルートワークス研究所が中心となって、日本のリーディングカンパニー14社とともに「21世紀のキャリアを考える研究会」の調査研究が行われた。その結果わかったのが、組織の中での個人のキャリアが、非常に激しい変化の中にいるということ。しかも、その変化は予測できない形で訪れることも多く、安定的に成長していくことへの期待ではなく、変化によって常に学び直しが必要になっているという事実だった（※）。

「常に新しいことを求められ、変化が激しいということは、応用力が求められるということ。ところが、そんな応用力を身につけるには、そもそも日本人の学びに対する態度に、大きな問題があるのです」と、高橋先生は語る。高橋先生は、市川伸一氏の学習動機モデルで示された学びの典型として、①例えば数学そのものが好きで中身に興味をもって勉強するという『充実志向』、②医者やパイロットを目指す場合のように、学んでいる内容そのものが将来自分にとって重要であると理解して学ぶ『実用志向』、③いい学校に行くとか、社会人だったらこの資格を取らないと管理職になれないなど、中身ではなく結果として得られるものにしか興味がない『報酬志向』の3つに注目する。

「充実志向と実用志向は、学ぶ中身が重要なので、深さも持続性も高くなりやすいけれど、報酬志向は学ぶ内容には興味がないから、残らない。その点、国際学力テスト（PISA）のデータでは、日本の生徒の学力は海外と比べて高いのに、その科目に興味をもっているか、どう役立つかがわかっているかは最低レベルでした。つまり、充実志向や実用志向を否定した勉強をさせてきたということです」

そのため『報酬志向』の学びが中心になっているのではないか。そして、報酬志向は功利性を求め、テクニック論に走る。それが今の学生や新入社員の大きな特徴だという。

「私はカーナビ症候群と言っているのですが、今の新入社員は上司をカーナビだと思っている。行く先を入力すると懇切ていねいに教えてくれる機械のように、いちいち仕事の指示を仰ぎ、答えを求めてきます。上司からすれば『少しは考えろよ』なんですが、『私は何も知らないから、知らずにやって失敗するのは無駄ですよね』とくる。結局、知識や経験に深みがないので、応用力がないんです」

結果、前述したような変化の激しい時代の中で、学び続けて自らのキャリアを築いていくことができなくなる可能性があるのだ。

「自論をもつ」勉強をする。そして、生涯学び続けるベースを作る

そんな功利性を求める学びに対抗するには、「自論をもつ」ことを大切にすべきだと高橋先生は強調する。

「カーナビで運転するときでも、必

（※）小誌No.49（2013.12）P41参照

ず自論をもち、カーナビと闘えと私は言っています。そうすると、『このカーナビはこういうときには使えるな。こんな特徴をもっているんだな』といったことを考えるわけです。最初から言われたとおりに運転するのとはわけが違います」

高校の学びでも、正解のないことに自論を作るという教育を徹底的に重視すべきだという。

「試験の内容にも問題があるんです。日本は丸暗記が多いですよね。例えば私はワインが好きなので、ソムリエの試験を見て典型的だと思ったのが、日本は品種や産地など丸暗記の知識を問うものが中心。一方、イギリスでは『いつもシャブリを頼むあなたの常連のお客さまが、今日は新世界のワインが飲みたいと言ったら、どのワインを勧めますか。その理由とともに述べよ』というような自論を問う問題なんです。このような考える試験の場合は、答えは1つではありません。採点者の主観も入ります。だから、複数人で採点をしたり、不服だった場合は別の人に採点してほしいという方法をとることができるものもある。手間はかかりますが、試験そのもので客観性を担保するのではなく、採点のプロセスで納得性を担保する。そういう考え方も必要だと思います」

日本の教育現場でも、正解のないものに自論をもつとか、応用力をつけるといった学びの重要性は、以前から言われてきたこと。実際に、さまざまに工夫され、実践されている先生も多いはずだ。

「ただ、日本の最大の問題は、言われていたのに変化が遅い。なかなか変われないという点なんです。女性活躍推進だってそうです。男女雇用機会均等法制定は、欧米と比べてそれほど出遅れていたわけではありません。なのに、その後の進み方が遅すぎる。合意形成に時間がかかりすぎ、変化に対する抵抗が強すぎる。その間に、若い人が昔以上に功利的になって、損得で物を考えるようになってしまったのが非常にまずいと思います」

だからこそ、改めて今、高校現場では実用主義や充実主義の学びを意識してほしいと高橋先生。

「教科と実社会との関連や、教科そのものがいかに面白いかということを、もっとちゃんと先生が教えないと。それを教えていけば、生徒は自然と勉強するんです。先生自身が、自分がなぜこの科目にはまったのか、どんなことが面白いのかを、イキイキと語るのでもいいと思います。そして、世の中に出てからも、ずっと学び続けないといけないんだ。そのベースを今、学んでいるんだということを理解させてほしいですね」

さまざまな学びの場を自ら作り楽しむ人々

「生涯学び続けることが大切」という高橋先生の言葉通り、多くの社会人が、仕事とは別に、何かしらの学びを継続している。

例えば、内田洋行教育総合研究所に勤務している平野智紀氏は、社会人を中心とした学びの機会を創出する経営学習研究所の理事として、学生時代から探究し続けている「大人のアートの学び」をテーマに、美術館などで答えのないアート作品についてみんなで語り合うというイベントを断続的に開催している。

平野さんの主催するアート鑑賞イベント「まれ美」の様子。シェアハウスやイベントスペースで、対話型観賞など新しいアートの楽しみ方を提案するイベントを実施している。名前の由来は、最初に「まれびとハウス」というシェアハウスで、そこを美術館にしてしまうというイメージで始めたので「まれ美」。

社会人も学び続ける

社会人インタビューに協力してくれた方々は、今も勉強し続けている。仕事との関連も含め、その一部をご紹介。

●研修コンサルタントとして独立したので、経営や営業のためにマーケティングを勉強したり、心理学の本などをよく読んでいます（研修コンサルタント・金井健史さん）
●ラフな会話ではなく、ビジネス英語としてちゃんとした言い回しなどを再度勉強しています（専門学校の広報・桑原東子さん）
●社会人になったばかりなので、マーケティングなど社会人として基本的に必要そうな本をいろいろ読むようにしています（広告会社の営業・佐鳥翔太さん）
●中学英語からやり直しているのとともに、自分のキャリアのためにも社会保険労務士の資格勉強も始めています（旅行会社の役員・大山恵一さん）
●技術は絶え間なく進歩しますので、常に勉強はし続けています。最近は経営の勉強も（IT企業のSE・折本和幸さん）
●企業価値をいかに高めていくかを考え、情報システム監査やIT全般統制の勉強をしています（物流企業の監査・稲村和彦さん）
●CG技術などの新しい情報は聞いたときにメモをして、後で調べるなど常に勉強は欠かせません（公益財団の職員・篠原たかこさん）
●調査分析は「答えのない問い」を扱うものです。これを探究し続けるために、社会人を中心にした学びの機会を創出する経営学習研究所の立ち上げにたずさわるなどの活動をしています。（企業内研究所の研究員・平野智紀さん）
●政策にかかわる提言をすることもあるので、日本社会全体の知識が必要になるため経済・経営を勉強しています（建築環境コンサルタント・大学准教授・林 立也さん）
●相手が何を考えているのか正しく理解することがとても重要なので、本当の意味で話を聞くという『聞く訓練』をしています（経営コンサルタント・八木 香さん）
●常に情報収集をしています。街中で聞こえてきたCMなど、言葉の言い回しに敏感になります（広告会社の制作・佐藤久美子さん）
●英語を猛勉強しています。TOEIC（R）テストも受けたりして、頑張っています（クレジット会社の商品開発・矢嶋浩明さん）
●理系は苦手と思いこんでいたのですが、業務の必要性に迫られて簡単なプログラミングなどやってみたら意外に面白かった。食わず嫌いはよくないですね（IT企業の広報・渡部成美さん）
●英語は必須。政治経済や現代社会など、お金に対する考え方や税金の仕組みなど、社会人として知っておかなければならないことです（IT企業の経営企画・吉井 聖さん）

高橋先生ご自身の高校時代の学びはいかがでしたか？

私の場合、たまたま塾の先生が数学の面白さを教えてくれて、数学にはまった。数学に自信があるし、好きで、よく勉強しました。ある日、証明問題をやっていて、証明はできたけど参考書とは違う方法で証明していた。それを数学の先生に見せたら「これいいじゃない」って誉めてくれた。インドもそういうやり方だそうですね。他の人と違う、クリエイティブな答えをすると、すっごく誉められる。これは「自論」をもつことにつながって、勉強の中身自体が面白いと思うようになり、学びが深くなるんだと思います。歴史にはまったく興味がもてなかったのだけど、大人になって本を読むとむちゃくちゃ面白い。特に人事をやると、歴史はすごく関係するんですよ。もっと興味をもたせてくれればよかったのに、って思いました。

「高校までは、正解のある問題ばかりをやっていた気がするのですが、大学に入って、社会とかかわるようになって、世の中は正解のない問題のほうが圧倒的に多いんだと気づいたわけです。それがとても面白かった。答えがあるわけじゃないので、カフェでおしゃべりするように対話を楽しみながら、考え続ける。そんな場を作りたくて、始めました」（平野氏）

平野さんと同様に、純粋に『学ぶ』を遊びたいという目的で、学びの場作りを始めた人が、「麹町アカデミア」を主宰する秋山進氏。高校時代、一つの数学の証明問題を2日かけて解くなどの経験から、「いろいろな角度から物事を考えるのは、楽しい」と感じていたという秋山さん。

「いい大人が、仕事や日常を離れて遊体的に、学問的視点で遊ぶのも楽しいだろうなと思って始めたんです。サロンのような場ですね。『自分がこう思った、こう考えた』ということを大事にしていくと、同じゴールにたどりつくにしても、もっている意味の量が圧倒的に多い。その豊かさを楽しみたいと考えています」

これらの人々の学びは、まさに『充実志向』とも言える。学んでいる内容そのものを楽しみ、豊かな世界を築きあげ、それが時には仕事にも生かされていく。

一方、『実用志向』で、仕事に必要な学びを実践しているのが、社会人インタビューにも登場していただいた折本和幸氏と稲村和彦氏。お二人とも、東京工業大学大学院イノベーションマネジメント研究科が社会人向けに開講している「キャリアアップMOTプログラム」と同大学社会人教育院の「IT Specializedコース」の受講生だった。これらのプログラムは、次世代の企業経営を担う人材向けの教育プログラムで、ビジネスに結びつく実践的な勉強を学ぶというもの。

「自分の仕事が、技術視点から経営視点に移ってきたこともあって、企業経営についてもっとしっかり勉強したいと思い、学びました。学んだことを現場で実践し、また壁にぶつかって学ぶ。その繰り返しで、常に学び続けることが大事だと思っています」（折本氏）

ちなみに、厚生労働省が実施している企業が教育訓練費にかける費用の調査（図）を見てみると、一人あたりの教育訓練費は1991年をピークに下がっている。「会社に入れば教育してくれる」というのは、すでに幻想。自ら学び続けることが重要になっているのだ。これらの学び続ける姿勢を育むうえでも、高校時代は実は重要な役割を果たすと、高橋先生は語る。

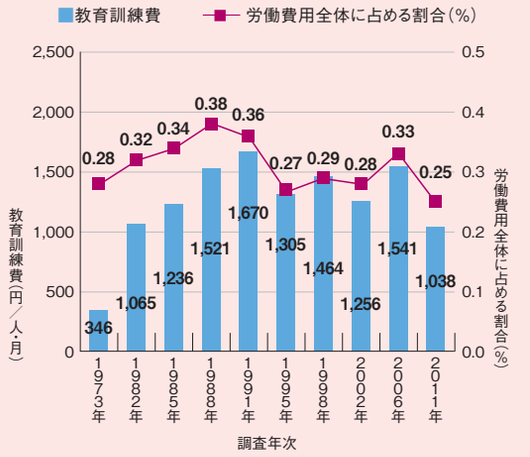
「自分自身がそうだからというわけではありませんが、ちゃんと勉強した経験が絶対重要です。高校生の場合は、充実志向が大変重要になります。だから、1科目でも2科目でも、すごく好きで一生懸命勉強した得意科目があることが大事なんです。世の中では不得意なことの征服も必要ですが、その前にまず、得意科目を作らないと。そうでないと、自己肯定感が育ちません。キャリアを作って社会で変化の時代にポジティブに前向きに生きていける人は、基本自己肯定感が強いんです。また、得意科目をしっかり勉強していると、勉強する癖がつきますし、勉強に対する抵抗感があまりなくなりますよね。学ぶことへの肯定的なイメージをもつことが、すごく大切だと思います」

社会をたくさん知ることでやれることを広げる。そんなキャリア教育が重要

社会人のインタビューを見ても、働く現場でどんな学びが役立つかは、意外なことも多い。技術系の人にとって文系の学びが役立つこともあれば、文系の仕事といわれる人に理系の学びが役立っていることもある。

「高校の授業が、将来に重要なんだということを理解するために、インターンシップやジョブシャドウイングはあったはずです。ただ、一時期、あまりにも狭い視野で紐付けしようとして、変な方向に行ってしまった。例えば、将

企業が支出する教育訓練費の推移



（資料）厚生労働省「就労条件総合調査」（1982年以前は「労働者福祉施設制度等調査報告」

来、音楽関係の仕事をするから、もうこの科目は関係ないのでやらないと思ってしまうとか。非常に狭く、具体的に紐付けしてしまった例です」（高橋先生）

大学受験するときに、どういう職種に就きたいのか、そのために一番いい勉強、いい学校を選ぶというキャリア教育も同様だと高橋先生。これらも、一種の功利性を求めてしまった結果ではないだろうか。

「このような狭い1対1の紐付けは、大きな間違い。世の中の変化が激しいから、高校のとき思っていたものと違うものに就かなければいけなくなったときに、ものすごいリスクが出てきます」

そこで、「やりたいこととやれることを絞り込むキャリア教育から、広げるキャリア教育へ」と高橋先生は言う。

「社会の変化が激しいから、興味を広げるために、いろいろな仕事を見聞きするのは大切なこと。その中で、勉強は大切なんだと理解していく。インターンシップをしながら、キャリアへの考え方を広げ、やりたい仕事とやれる仕事を広げる。それが、今大切なキャリア教育です」

実際、前出の社会人インタビューの中で、「こんな勉強が、この仕事に役立つんだ」という広がりの一端を感じていただけたのではないだろうか。

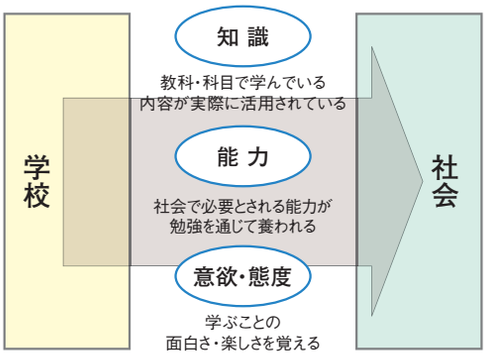
「やりたいことを広げるためにいろいろな仕事を見て、体験して、ああやっぱり勉強って大切なんだ、自分たちがやっていることって意味があるんだって興味が広がればいいですね。広げる方向にもっていく。そういうふうに実用性を考えてほしいですね。昔とは違う。想定外のことが起こる。変化が激しい時代。しかも、それぞれの仕事の専門性が高くなり、ちゃんと勉強しないと太刀打ちできない。一生涯勉強し続けていかないといけなくなっている時代。だから、会社に入ったら終わりではなく、そこからがスタートなんだ。そういうキャリアのとらえ方が、非常に大切な時代になったのです」

編集部より～今伝えたい、教室からつながる、学ぶ・働く・生きる

勉強が将来、何に生きるのか、そんなことは考えなくても、学力がつけばいい…そう考えることもできます。でも、ほんとうになぜ学ぶのかを伝える必要はないのでしょうか。

今回、特別授業「なぜ学ぶのか」に参加した立命館宇治の高校生たちは「勉強する意味がわかると、行動に移すことができる」「学ぶ理由はいろいろあると知ってすっきりした」「『将来』っていつなんだろうと漠然と疑問に思っていたけれど、今日の授業で見えない未来について考えることができた」と語ってくれました。酒井先生は1年間のキャリア教育と特別授業を通して「生徒は学びの意味や、なぜ生きるかという大きな問いを持っている」と感じたそうです。

生徒が学ぶことへの根源的な問いを持った時、それは自分自身の人生について自分の頭で考え、自分の手でつくってゆく出発点です。



社会人達は学校で学んだことが仕事や生活に生きていると振り返ってくれました。社会に参加するために、学習の内容は働くこと生きることにつながっている、学ぶことは働く基礎力を培うこと、自分をつくることなのだと折に触れ「きちんと語り続ければ必ず伝わります」と長田調査官は言います。教室は未来につながっていると伝えていくことが、より確かな将来への礎をつくるのではないでしょうか。